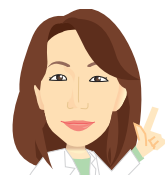


真理子先生の

女性のさかた



院長
伊藤 真理子
プロフィール

●(いとう まりこ) 1986年山形大学医学部卒業。山大病院、篠田病院を経て2005年6月に真理子レディースクリニックを開業。日本産科婦人科学会認定産婦人科専門医。

出生前診断

赤ちゃんの誕生を控えたご夫婦から「性別は？」「大きさは平均的ですか？」「異常はありませんか？」といった質問をいただきます。こうした疑問にお応えするのが出生前診断です。

ご夫婦で話し合ってください

出生前診断は妊娠10週から18週くらいまでの間に行われます。

出生前診断にはいくつかの種類がありますが、診断を受ける前に、それぞれの費用や流産のリスク、そして出された結果にどう対処していくかについて御夫婦で事前に話し合っておく必要がある

でしょう。私としては決して軽い気持ちで受けて欲しくはないと思っております。

一般的な超音波検査

そんな出生前診断の中で最も一般的とされるのが超音波検査です。産科医にかかっていたら毎回受ける検査で、費用やリスクも少なく、性別はもちろん、手足の指や顔まで識別できるほどです。

新型出生前診断も登場

他の出生前診断としては絨毛検査、クアトロテスト、羊水検査、平成26年4月から始まった新型

出生前診断などがあります。それぞれ分かれることと分らないことがあり、検査時期やリスク、精度も様々です(表1) 新型出生前診断は現時点で県内で対応できる病院はなく、宮城や新潟に赴く必要があります。受ける方の条件もあります。

出生前診断(表1)

	わかること	検査時期	リスク	費用と確率
新型出生前診断(NIPT)	13,18,21トリソミー	10週~	なし	高額で施設が少ない
絨毛検査	染色体異常	10~11週	流産	染色体しかわからない
母体血清マーカーテスト	18,21トリソミー 開放性神経管奇形	15~18週	なし	低率でわかるのみ
羊水検査	染色体異常	15~18週	流産	染色体しかわからない

他の先天性異常も

繰り返しになります。ご出産前の赤ちゃんの診断に関しては様々な意見があることを申し添えておきます。

また出生前診断では主として染色体の異常を識別しますが、日本で発生率の高い先天性異常としては染色体異常より頻度の高いものもいくつかあります(表2)

(表2)

先天異常で発生の多いもの

- 心臓の疾患
- 開放性神経管奇形
(二分脊椎・無脳症)
- 唇・口蓋裂
- 消化管閉鎖
- その他
横隔膜ヘルニア、膈ヘルニア、
目の形態異常、
手・足の異常